

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2024年7月26日

楽園のゲルニカ

「緑色にかがやく海、海辺に立ち並ぶやしの木、スコールが作った深い森の中には、見たことないほど大きな木と見たことないきれいな鳥。お母さん、本当にここが戦場になるのでしょうか」太平洋戦争末期の日米の戦いを史実に基づいて描いた漫画『ペリリューー 楽園のゲルニカ』武田一義(ヤングアニマル COMICS 1～11巻)の主人公、田丸均^{たまるひとし}一等兵は新たな任地ペリリュー島を目にして思わずそうつぶやきます。

ペリリュー島は、パラオ諸島に属する面積13km²の小さな島です。戦前の日本はパラオを統治下に置き、ペリリュー島には当時「東洋一」ともいわれた飛行場が築かれました。ところが太平洋戦争において日本は、ミッドウエー海戦の敗北をきっかけに劣勢に立ち、マリアナ沖海戦では多数の軍艦、航空機を失う壊滅的な大敗を喫してしまいます。制海権、制空権ともに失った日本に対し、アメリカはフィリピン奪還の足がかりとしてこの南太平洋に浮かぶ小島に54000名の兵力で襲いかかります。迎え撃つ日本軍守備隊は10900名。航空機による攻撃や軍艦からの艦砲射撃を考慮すると、アメリカの戦力は日本の数十倍から数百倍に相当したといわれます。守備隊の指揮官、中川州男大佐は、島の各所に洞窟やトンネルを掘り進め、島全体を要塞化する作戦をとります。そこには、敵をペリリューで足止めし、フィリピン侵攻を遅らせるねらいがありました。ペリリュー島は珊瑚礁の堅い岩でできており掘るのは大変な作業でしたが、日本軍は人力で岩盤を掘り進み、激しい攻撃に耐えうる堅固な壕を築きあげ、敵の上陸を待ったのです。

1944年9月、アメリカの艦隊がペリリュー島に到着します。アメリカは海と空からの攻撃によって、日本軍守備隊を徹底的に叩き、反撃能力を奪った後に陸上部隊を上陸させる作戦でした。戦艦5隻、巡洋艦9隻、駆逐艦14隻からの艦砲射撃、8隻の空母を飛び立った航空機からの空爆によって、美しかった島からは緑が失せ、わずか数日で岩肌をむき出した姿に変わってしまったといいます。

9月15日朝、いよいよアメリカ軍は上陸作戦を開始します。日本軍によるある程度の抵抗はあったとしても、戦闘は3、4日で決着する、とアメリカは踏んでいました。艦砲射撃による援護の中、上陸作戦に加わったアメリカ軍海兵隊の一人、ユージン・B・スレッジは、その著書『ペリリューー・沖縄戦記』(講談社学術文庫)の中で、当時の様子をこう書いています。「すさまじい光景を目の当たりにしながらわれわれは前へ突き進んだ。先を行くアムトラック(注:上陸に用いられた水陸両用戦車)の隊列が暗礁に接近すると、砲撃を受けて巨大な水柱がいくつも噴き上がった。海岸は今や見渡す限り火炎に包まれ、その向こうに煙が分厚い壁のように立ちのぼっている。大規模な海底火山の噴火を見るようで、島に向かうというより、燃えさかる地獄の底に吸い込まれていくようだ」

日本軍は敵の激しい攻撃を壕の中で耐え忍び、反撃のチャンスをつかっていました。日本軍の海岸陣地はすべて壊滅したと考えていたアメリカ軍が砂浜に上陸する瞬間を狙って、日本軍は最大火力を集中し攻撃を加えます。この攻撃により、アメリカ軍最強とうたわれた第1海兵師団の上陸部隊は甚大な損害を受けて撤退、日本軍は敵の上陸阻止に成功したのです。しかし圧倒的な人員、物量を誇るアメリカ軍は、わずかその数時間後に第2次上陸作戦を開始します。第1次上陸作戦時に日本軍の火砲の位置を把握したアメリカ軍は、艦砲射撃や航空機による攻撃により日本軍の陣地を一つ一つ破壊し、ついにペリリュー島への上陸を果たします。ここから日本軍は海岸を捨て、山や谷に隠された壕に潜み、飢えや渴きに耐えながら74日間におよぶ過酷な持久戦を戦うこととなります。美しかったペリリュー島は、日米あわせて12000名以上の戦死者を出す凄惨な戦場と化すのです。

漫画のタイトルにもなっている「ゲルニカ」とは、スペイン、バスク地方にある小さな町の名前です。政府軍と反乱軍によるスペイン内戦が勃発していた1937年、ドイツ空軍の助力を得た反乱軍がゲルニカに無差別爆撃を行い、多数の一般市民が殺害されるという悲劇が起こります。当時、一般市民への空爆は史上初の惨事でした。事件を知った画家パブロ・ピカソは、高さ3.5メートル、幅7.8メートルの巨大な絵画『ゲルニカ』を完成させます。爆撃を受けた人々や動物などが混沌の中で絶叫する様をキュビズムの手法で描いたこの絵は、パリ万博に飾られ大きな反響を呼びます。戦争の非人道性を告発し、戦争への怒りを表現した『ゲルニカ』は、現在、反戦のシンボルとしてスペイン、マドリードのソフィア王妃芸術センターに展示されています。

ペリリュー島の戦いで、日本軍守備隊の主力を担ったのは陸軍第14師団歩兵第2連隊でした。実はこの歩兵第2連隊は、茨城県水戸市を編成地としており、兵隊の多くも茨城県出身者でした。「満州」と呼ばれた中国北東部に駐屯していましたが、戦局の変化により南太平洋に浮かぶペリリュー島へと転進の命令がくだったのです。

『ペリリューー 楽園のゲルニカー』の主人公、田丸均一等兵は、臆病で優しい性格の、漫画を描くことが趣味の青年です。戦闘のさなかでも小さなノートと鉛筆を手放さず、漫画やイラストを描き、戦争が終わったら漫画家になることを夢見ています。細いタレ目に眼鏡をかけた風貌は、命がけで敵と戦う兵隊にはとても見えません。田丸の実家は水戸市で「たまる食堂」を営んでいる、という設定です。『ペリリューー…』のもう一人の主人公ともいえる存在が吉敷佳助上等兵です。責任感、正義感が強く、射撃の腕も抜群の吉敷は、なぜか田丸と気が合い、いつも助けてくれる頼もしい存在です。吉敷は筑波の米農家の出身です。

『ペリリューー…』の前半では、上陸してきたアメリカ軍とそれを迎え撃つ日本軍守備隊の戦いが描かれます。海岸線を突破された日本軍は壕やトンネルに隠れてゲリラ戦を展開しますが、優秀な武器を持ち、圧倒的な物量を誇るアメリカ軍の攻撃の前に虫けらのように殺されていきます。銃弾で顔の半分を吹き飛ばされ仲間にとどめを懇願する兵隊、おとりとなって敵の一斉射撃をあびる負傷兵たち、壕に立てこもっていたところを火炎放射器の攻撃を受け黒こげになった死体、病気やケガで動けなくなった者たちには集団自決が強いられます。熱帯気候は死んだ兵隊の体をすぐに真っ黒に変色させ、その周囲を無数のハエが飛び回ります。食糧、水も尽き、飢え

と渴きに耐えながら、それでも日本兵は戦い続けるのです。

アメリカ軍上陸から74日間を戦い抜き、武器弾薬も尽き果てた11月24日、ペリリュー日本守備隊の指揮官「大佐」(注1)はパラオ集団司令部に「サクラ、サクラ」と電文を打電します。この電文は、最後の斬り込み攻撃を行って玉砕(注2)することを意味するものでした。「大佐」は、明かりの燃料も尽きた真っ暗な司令部壕内に生き残った将兵を集めます。黒い影に血走った目だけで描かれた「大佐」は、鬼気迫る様で最後の訓示を行います。ペリリュー島における組織的戦闘の終結を告げた後に「大佐」は自決し、その夜、健在者による遊撃隊がアメリカ軍基地に捨て身の斬り込みを敢行します。こうしてペリリュー島日本軍守備隊は玉砕するのです。

少人数の集団で島内をさまよっていた田丸と吉敷たちは、その夜、久しぶりに戦闘の物音を耳にします。しかし、田丸たちにはそれが味方の玉砕の夜襲であったことなど知るよしもありません。彼らはアメリカ軍の追撃を逃れながら、食料と水を求めて島内をさまよい続けるのでした。

記録によると、74日間の組織的戦闘が終わったあとも、アメリカ軍による、島内に潜伏する日本兵掃討作戦は続きました。ペリリュー島の戦い全体を通じて、軍属(注3)を含め10900名といわれる日本軍守備隊のうち10000名以上が命を落としたとされています。わずかに生き残った日本兵は、山中の壕などに隠れ、アメリカ軍の食糧や物資を盗み出すことで命をつなぎました。1945年8月15日、日本はポツダム宣言を受諾し降伏、太平洋戦争が終結します。しかし、山中に潜伏するペリリューの日本兵にその事実を知るすべはありませんでした。島内に潜伏し、アメリカ軍への反撃の機会をうかがっていた彼らが、敗戦の事実を受け入れ投降したのは、実に終戦から1年半以上経った1947年4月のことです。最後まで生き残ったのはわずか34名でした。

私事で恐縮ですが、筆者の曾祖父の弟の息子、わかりやすく言うと筆者の祖父の従兄弟に梶房一(ふさいち)という人物がいました。彼は、水戸歩兵第2連隊の一員としてペリリュー島でアメリカと戦い、生き残った34名のうちの一人です。早くに父を亡くした房一は、茨城県北部にある筆者の実家で、親子ほど年の離れた筆者の祖父母に育てられました。そこで召集令状を受け取り、出征したのです。

終戦を迎える少し前、筆者の実家に房一の戦死の知らせが届きました。祖父母たち家族は房一の葬式を執り行い、空の棺を埋めた墓に「梶房一之墓」と墓標を立てました。ところが、一年あまりしてひょっこりと房一が実家に帰ってきたのですから、家族や近所の人たちの驚きといったありません。「房は、南方に送られて、みんな死んだとばかり思っていた。そしたらある日、ただいま、と声がするので出てみたら房だったので本当に驚いた。房は、自分が死んだことになっていると知り、怒ってお墓に行って墓標を引っこ抜いてしまったんだよ」という話を、幼いころ何度も祖母に聞かされました。しかし、房一おじさんの任地がペリリュー島だったということを知ったのは、ずっと後、大人になってしばらく経ってからのことでした。

『ペリリュー ―楽園のゲルニカー』に話を戻します。日本の敗戦を知らない田丸たちは、米軍の基地に忍び込み食糧や物資を調達していましたが、ある日ゴミ箱に捨てられた新聞を目にします。そこには「WAR ENDS」「Japanese Surrender」(戦争は終わった、日本は降伏した)と書かれていました。銀座四丁目に立つアメリカ兵の写真、アメリカ兵と一緒に談笑する日本人の写

真を載せた雑誌もありました。田丸と吉敷はそれらを持ち帰り、山中の壕に潜伏する上官や戦友に見せます。潜伏する日本兵の間に動揺がはしります。もしも日本が戦争に敗れているなら、自分たちが今こうして山中に隠れているのは何のためなのか？と考えるのは当然でしょう。しかし、だからといって簡単にアメリカ軍に投降するわけにはいきません。もしも戦争が継続していたらアメリカ軍に殺されてしまうかもしれないし、何よりも日本の兵隊たちは「生きて虜囚の辱めを受けず」という思想を徹底的に教え込まれていました。敵の捕虜になるくらいなら死を選択しろ、というわけです。敵に投降することは死刑に相当する重い罪でした。

潜伏する兵隊たちのリーダー島田少尉は、しばらく考えた後「やはり戦争は続いている」と結論づけます。「故郷の親兄弟、友人、恩人、恋人を思い出してほしい。もし本当に戦争に敗れていたならば、彼らはこんな満面の笑顔でいられるものか。これは我々に心理的な動揺を与えるためのアメリカの策略だ」

しかし、田丸や吉敷の心中には、戦争は終わっているのでは？という疑念がくすぶり続けます。潜伏する兵隊たちの仲間には重い病気の者もいました。もしも戦争が終わっているなら、彼らは病院で治療を受けることもでき、一命をとりとめることができるかもしれません。

田丸と吉敷は密かに投降を企てます。一度は失敗し、壕に連れ戻され監禁されてしまいますが、隙を見計らい二度目の脱走を決行します。アメリカ軍基地へ向かう途中で、吉敷は追跡してきた島田少尉に撃たれ、降りしきる雨の中、命を落とします。田丸は吉敷の遺体を敵に見つからないよう安置すると、たった一人でアメリカ軍基地の前に、先端に白い布を結びつけた棒きれを持って立つのです。連行され尋問を受けた田丸は、まず最初に戦争は続いているのか、終わっているのかを尋ねます。「戦争ハ終ワッテイマス。1945年8月15日、日本ハ無条件降伏シマシタ」という通訳のことばに、田丸はその場に崩れ落ちてしまうのでした。「吉敷くん、やっぱり終わっていたよ。終わっていたのに……」

『ペリリュー玉砕／南洋のサムライ・中川州男の戦い』早坂隆著(文春文庫)によれば、実際のペリリューで、潜伏していた34名の日本兵の投降のきっかけを作ったのは海軍上等水兵だった土田喜代一さんでした。1947年4月、土田さんは他の兵隊たちに気づかれぬよう地下壕を脱出し、アメリカ軍に投降します。米軍によって保護され、日本がとくに降伏している事実をようやく理解した土田さんは、潜伏生活を続ける33名の説得を試みますが、兵隊たちは、それが自分たちをおびき出すためのアメリカの罠ではないか、という疑いを捨てきれません。

そこで土田さんは、日本にいる彼らの家族や友人から手紙を送ってもらい、終戦を信じさせようとした。潜伏を続ける兵隊たちは、手紙の内容はもちろん、見覚えのある懐かしい筆跡を見て、これが偽物でないことを確信します。33名の日本兵たちはこうして投降に応じたのです。

『証言記録／生還／玉砕の島ペリリュー戦記』平塚枢緒著(Gakeken)に、日本兵たちに投降を説得する任務を負った澄川少将と土田さんらが、日本兵たちの潜伏する壕を訪れる場面が記されています。少し長くなりますが引用します。

【手紙の効果はあった。仮に一人か二人の手紙であったなら、必要以上の警戒心と疑心暗鬼の洞窟生活を続けている兵隊たちは、テンから信用しなかったかもしれない。だが、手紙は四人、

五人の兵の家族からであり、それも親兄弟のみならず親類から兵隊個々の友人のものまである。

(やっぱり本物に違いない)

兵隊たちは次第に態度をやわらげつつあった。しかし、万が一ということを考えると洞窟を出る勇氣は鈍り、ふたたび不信感が体をよぎるのだった。

兵士たちの中では最年長の工兵である斎藤平之助さんは、比較的冷静だった。

「澄川少尉たちの足音が聞こえてきたのは午前十時ごろだった。珊瑚礁の島だから足音でもよく響く。カタン、カタンって感じだね。いよいよ来たぞというわけです。そうしたら、土田の声がして、『隊長殿、隊長殿』という。全員弾を込めろ、明かりを消せと大変だった。皆顔が真っ青だった。そして『これで終わりだ、一人二人で勝手な行動はするな』と申し合わせ、そして、これが最後になると思うからということで、皆で食おうと缶詰を開けたのだが、誰も手をつけなかった」

兵隊たちは話し合った。結果は「とにかく壕を出て様子を見てみよう」ということになり、梶上等兵と浜田上等兵が完全武装で壕を這い出した。すると壕からほんの数メートル先の岩陰に白髪の頭が見えた。二人はほとんど同時に叫んだ。

「そこにいるのは誰だ！」

「澄川少将だ、撃つな」

「それでは出て来て下さい」

「撃つんじゃないぞ」

「撃たないから出て来て下さい」

澄川少将はゆっくりと岩陰から姿を現わした。白髪のため一見西洋人に見えたが、まぎれもなく日本人である。梶、浜田両上等兵はじっと油汗のにじんだ額にしわを寄せながらも、安堵感が走り抜けた。】

筆者が幼いころ、梶房一が筆者の実家を訪れたことがありました。レーシングカーのおもちゃを買ってきてくれて、一緒に組み立てて遊んでくれたり、竹を切って竿を作り、川で釣りのやり方を教えてくれたり、筆者には「優しくておもしろい房一おじさん」の記憶しかありません。しかし、梶房一は戦争という特異な環境の中で、彼にしかわからない彼自身の物語を生きていたのです。戦後、梶房一は東京都町田市に居住し、結婚し、二人の男の子を育て、平成17年に亡くなりました。ペリリュー島での経験について、いろいろ聞いてみたかったという気持ちと、興味本位で安易に聞かなくてよかったという気持ちと両方があります。

『ペリリュー ー楽園のゲルニカー』の作者、武田一義さんは漫画を描くにあたりペリリューの生還者の方々に取材を行ったといいます。しかし全員が全員、必ずしも快く話を聞かせてくれる人ばかりではありませんでした。『ペリリュー …』11巻には、そんな武田さん自身の経験にもとづくと思われるエピソードが描かれています。

時は流れて平成、田丸均の孫は雑誌の編集者になり、祖父の物語を漫画にしようと考えます。そこで漫画家と二人でインタビューを行うため、ペリリュー島の生還者たちをたずねます。ある日、水戸市に住む生還者の自宅を訪ねた二人に、鋭い目をした老人は「漫画…。話を聞けば体験していなくても描けるとお考えですか？」と尋ねます。「漫画に限らず、小説も映画も戦争を扱ったものがありますが、私はああいうものが嫌いです」「あなたがペリリューについて漫画を描

くことはあなたの自由だ。私は一切無関係ということにさせていただきたい」

生死きわの際をさまよった自分の戦争体験を、わかったようなふりをして漫画や小説にしてほしくない、という老人の気持ちは理解できる気がします。しかし、その一方で考えなければいけないのは、戦争の記憶をどのように後世に継承していくかという問題です。戦後79年を迎える今、戦争経験者は年々減少しています。筆者も含め、戦争を経験していない世代が、あの戦争をどのようにとらえ、行動していくか、という課題が突きつけられているのだと思います。

以前、終戦記念日近くなると毎年テレビで放送されていた映画『火垂るの墓』を見なくなって十年近く経つような気がします。テレビで扱うにはあまりに重くて暗く、視聴率がとれないというのが放送されなくなった理由だ、と聞いたことがあります。原爆による被害の生々しい描写や残酷性などが問題となり、漫画『はだしのゲン』を撤去した図書館も多数あります(注4)。戦争を体験しなかった私たちが、何をもって戦争の真実を知り、何をもって過去の歴史に思いを致すのか、特に若い世代や子供たちにどのように戦争を伝えていくのかを考えると、漫画や小説や映画は、その重要な入り口になるのかもしれない。

未来を考えると、その土台となるのは過去です。過去を知る、歴史を学ぶ意義はそこにあると思います。『それでも日本人は「戦争」を選んだ』(新潮文庫)で、著者で東京大学教授の加藤陽子さんは「私たちは日々の時間を生きながら、自分の身のまわりで起きていることについて、その時々の評価や判断を無意識ながら下しているものです。また現在の社会状況に対する評価や判断を下す際、これまた無意識に過去の事例からの類推を行い、されに未来を予測するにあたっては、これまた無意識に過去と現在の事例との対比を行っています。／そのようなときに、類推され想起され対比される歴史的な事例が、若い人々の頭や心にどれだけ豊かに蓄積されフアイリングされているかが決定的に大事なことなのだと私は思います」と述べています。

8月、日本は過去の戦争を想起し、犠牲となった数え切れない生命に祈りを捧げる時期を迎えます。正しい事実を知ろうとすること、そして正しい問いを持つとすることが、79年前の戦争の悲劇を未来につなげる営みに変えるのだと信じたいと思います。(終)

注1)漫画『ペリリュー ー楽園のゲルニカー』の中では、日本守備隊の指揮官は「大佐」とのみ表記され、姓名は明らかにされていない。中川州男大佐がモデルになっていると考えられる。

注2)玉砕。玉のように美しく砕けるの意味から、太平洋戦争中、“全滅”を指す言葉として用いられた。

注3)軍属。軍隊に所属する軍人以外の者。戦闘には直接関与せず、事務、建設、物資や備品の補給・管理などの仕事に従事する。

注4)漫画『はだしのゲン』撤去の理由としては、暴力シーンや性描写、歴史認識の問題などもあげられています。

追記)漫画『ペリリュー ー楽園のゲルニカー』1～11巻は、本校の図書館にあります。この文書を書くため筆者が1ヶ月ほど(長くてすみません)借りていましたが、先ほど返却してきたので図

書館で読めます。是非一度読んでみてください。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。